

「アメリカに住むキリスト者として」

私達が毎週見ておりますローマ書はパウロが書いたものでありまして、彼はクリスチャーニティーの土台を築いていくにあたり、彼らに影響をおよぼす「国」について言及しておかなければならない必要を感じていたかと思われま

特にパウロの時代、ローマ帝国の統治下の元に生きていた彼らにとって、このローマとの関わりをどうするかということはとても大切なことでありました。ローマが自分達をどう取り扱うかということが、彼らの信仰生活にも大きな影響を与えたからです。彼はそのことを踏まえてローマ13章をこう書き始めたのです。

1 すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである。

私達が信仰を持つということは、自分の国の国民をやめることではありません。私達はクリスチャンとして、その国の民として生きていくのです。パウロはそのことを踏まえて、彼もその仲間も直面していたことについて触れているのです。そして、それは今日の私達にとりましてもとても大切なことなのです。

個人的なことになりますが、私は現在、アメリカ市民です。私は韓国で生まれていますので、短い間でしたが韓国籍を有していました。しかし、その後、日本国籍を持ち、そして、現在は米国籍を持っています。7年前に韓国を訪れました時、イミグレーションでコンピューター画面上の私の情報を見ている空港職員に「あなたは韓国で生まれたのか」と聞かれ、驚きました。このような事実と記録が消されるはないのです。

聖書は私達は地上では寄留者であり、その国籍は天にあると言っています。そして、それはまことであります。ですから、そのような意味においては、一つの国の国民であるということも一時的なものなのだとは割り切ることができるかとも思うのですが、それではどうでもいいのかということなのかというと「そうではない」とパウロはここで言っているのです。

このローマ書13章を読む時に、ある方は「すべての人は、上に立つ権威に従うべきである」と書かれているのだから、全ての権威に服従しなければならないと思われるかもしれませんが、確かにこの言葉はいかなる権威も神の権威によって存在しているのだから、その権威に従いなさいと言っているように思えま

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

す。しかし、こうなると色々な疑問がわいてきます。あのヒットラーが台頭したナチス・ドイツはどうなるのか。第二次大戦中に天皇が神格化され、信仰の自由が失われた、あの時の日本はどうなのか。

もし、明日からアメリカ合衆国が私達の信仰というものを制限してきたらどうするのか。神の権威のもとに許されて存在しているアメリカ合衆国なのだから、その権威に全て従うべきなのか。国が要求するのなら、私達の信仰も妥協していくのか。それが聖書が言っていることなのではないでしょうか。

この「権威に従う」ということに関して、ここに具体的に書かれていることをまず見てまいりましょう。13章6節以降にこう記されています。

6 あなたがたが貢を納めるのも、また同じ理由からである。彼らは神に仕える者として、もっぱらこの務に携わっているのである。7 あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果しなさい。すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納め、恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬いなさい。8 互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というこの言葉に帰する。10 愛は隣りに害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。

今日、開かれているローマ13章は特別選んだ聖書箇所なのではなくて、ここまでローマ書を順番に見てきて、今日にいたった箇所であります。そして、興味深いことに今日、4月15日はこの国の税金申告の期限日です。そう考えますと、このローマ書の言葉が今日、開かれるとはなんとタイムリーなことでしょうか。

聖書が税金のことにまで触れていることに驚かれる方がいるかもしれません。でも、私達が信仰者として生きるこの世にある限り、この類のことを避けて通ることはできません。イエス・キリストもマタイ22章15節—22節でこの税について言っています。

そのときパリサイ人たちがきて、どうかしてイエスを言葉のわなにかけようと、相談をした。そして、彼らの弟子を、ヘロデ党の者たちと共に、イエスのもとにつかわして言わせた、「先生、わたしたちはあなたが真実なかたであって、真理に基いて神の道を教え、また、人に分け隔てをしないで、だれをもはばかられないことを知っています。それで、あなたはどう思われますか、教えてください。カイザルに税金を納めてよいのでしょうか、いけないのでしょうか」。イエスは彼らの悪意を知って言われた、「偽善者たちよ、なぜわたしをためそう

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

とするのか。税に納める貨幣を見せなさい」。彼らはデナリーつを持ってきた。そこでイエスは言われた、「これは、だれの肖像、だれの記号か」。彼らは「カイザルのです」と答えた。するとイエスは言われた、「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

この質問はどうかしてイエス様の失言を期待する者達によってなされました。この質問を現代風に言いますならばこうなります「どうぞお答えください。IRSに税金を納めていいでしょうか。いけないでしょうか」。今のところ、私は牧師としてこのような質問を受けたことはありません。

なぜ、この人達はイエスにこのようなことを聞いているのか。少し今の状況と違う背景があります。それは彼らは独立国家に暮らしていたのではなく、カイザルを皇帝としたローマ帝国の支配の下に置かれていたのです。そして、その中でこの言葉は生まれてきたのです。そして、当時、その皇帝カイザルは神として崇められていたのです。

ですから、この質問をした者は思ったのです。もし、イエスが「いいや、カイザルに税を納める必要などない」と言えば、ローマに対する反逆罪としてイエスを訴えることができる。また「納めよ」と言えば、あなたは「自ら神を名乗る者に税を納めるのか」ということになり、イエスのこれまでの教えを責めることができる。

しかし、イエス様は言われました。「これは、だれの肖像、だれの記号か」。彼らは「カイザルのです」と答えます。イエスは言われます、「それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」。

私達は税金の無駄遣いとか、それが特定の人々の私欲のために使われていたというようなことを聞くことがあります。それは残念なことであり、許されることではありませんが、基本的に税金は公共の必要のために使われています。税金がなければ、私達は今朝、この教会まで来ることができなかったことでしょう。道路の整備や工事はこれら税金を使ってなされています。すなわち税金は社会が機能するために定められているものであり、聖書は私達にこのように定められたルールに反するようには勧めてはいません。聖書は私達が自ら属する国に対する義務と責任をしっかりと全うすべきだと言っているのです。

今日の13章の後半の8節にパウロはこう書き加えました。「互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない」なぜ、国家の権威を取り上げておいて、その後に愛をパウロは語っているのでしょうか。このところで私達は目が開かれるのです。バイブルは隣人に対する愛を語っている。

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

そして、私達にとって隣人と言われて、その心に思い浮かべるのは当然、人間なのです。しかし、パウロはこの箇所においてその愛は人を超えて国にまでおよぶのだと言っているのです。そもそも国家と言えどもそれは人間の集まりなのです。「自分を愛するようにあなたの隣人を愛する」という聖書の教えの彼方には国があるのです。

ペテロがペテロ第一の手紙2章13節—15節において言っている通りです。「あなたがたは、すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさい。主権者としての王であろうと、あるいは、悪を行う者を罰し善を行う者を賞するために、王からつかわされた長官であろうと、これに従いなさい。善を行うことによって、愚かな人々の無知な発言を封じるのは、神の御旨なのである」。

しかし、それはこの聖書箇所がいかなる権威に対しても「盲従」していきなさいとは言っていないということです。あえて「盲従」という言葉を使いましたのは、盲目的に、何でもかんでも言われたことに従えと言っているのではないということです。

そもそも国家とその権威というものは聖書の中でどのように作られていったのでしょうか。聖書で言う国家とはイスラエルのことなのですが、その辺りの興味深い経緯がサムエル記上8章に書かれています。今、お話ししているローマ13章の時代からさかのぼること約、1100年前、このようなことが起こりました。

4この時、イスラエルの長老たちはみな集まってラマにおけるサムエルのもとにきて、5言った、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください」。6しかし彼らが「われわれをさばく王を、われわれに与えよ」と言うのを聞いて、サムエルは喜ばなかった。そしてサムエルが主に祈ると、7主はサムエルに言われた、「民が、すべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。8彼らは、わたしがエジプトから連れ上った日から、きょうまで、わたしを捨ててほかの神々に仕え、さまざまの事をわたしにしたように、あなたにもしているのである。9今その声に聞き従いなさい。ただし、深く彼らを戒めて、彼らを治める王のならわしを彼らに示さなければならぬ」。

当時のイスラエルの民達は回りの国々を見て、そして神に仕える祭司サムエルに「私達を裁く王を立てて下さい」と言ったのです。しかし、神に仕える祭司サムエルは彼らの願いに釈然としない思いがありました。故に彼は神様に祈ったのです。すると神様は「彼らの願いを聞き入れなさい」と言われる。しかし、

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

同時に「人の権威のもとに置かれる時に、彼らの身にどのようなことが起きてくるかということをやめ伝えなさい」と言われました。

すなわち、この箇所のすぐ後、10節以降にこう書かれています。「彼は彼らの子供を戦車の前に走らせるであろう。彼はまた彼らをしてその土地を耕させ、その作物を刈らせ、またその武器と戦車の装備を造らせるようなことが起こるだろう」と。

ここには彼らがある権威のもとに置かれると、彼らはやがて徴兵されるだろう、税金を課せられ、それは軍備のために用いられるであろうということが暗示されています。しかし、イスラエルの民達はこれらのことを聞きながら、それでも自らを治める王を求めたのです。そして、神様はそれを受け入れたのです。このところからイスラエルの民は人間が作り出す国家の権威の下に生きる、その歩みが始まったのです。

そうです、彼らは権威のもとに置かれる者達が何を求められるようになるのかということを知られながら、それでも自らを人の権威のもとに置くことを求めたのです。そして、説明するまでもなく、このことはイスラエルに限らず、人間の歴史の中に起こり、時にそれは私達の歴史に暗い影を落とすことになったのです。なぜなら、その権威をもつ者は私達と同じ人間ですので、その人間が民の必要と益のためにその権威を用いず、私利私欲や自らの権力のためにその権威を用いるのなら、民は悲惨な状況に置かれてしまうからです。

今日、ここで注目したいことは、神様はこのようなことになることが分かっているゆえに、イスラエルの民にその憂慮を予め伝えたのですが、民はそれでも自らの上に立つ権威を求めました。そして、神様も彼らのその願いを受け入れたということなのです。この神様の承認は驚くべきことだと思いませんか。

よく親が子供の言動を見ていて、「危なっかしい」と思うことがあります。このまま行くと子供が「トラブルに巻き込まれる」ということを親は察知します。ですから子供を叱り、諭し、それでも彼らが聞き従わなければ強制的にでも、そのことを止めさせます。

神様の立場というのは実にそのようなものでした。しかし、神様はこのイスラエルの民の願いをそのまま受け入れました。そして、この後、実際にイスラエルの歴史には多くの悪王が現われ、民達はひどい目にあっていくのです。そのことを神様は知りつつも、彼らの願うようにさせました。

皆さん、この古の出来事は何を私達に語りかけているのでしょうか。神様は私達のいく末を気にかけていないのでしょうか。このことは痛い経験をして学ぶがいいというような神様の人間に対する教訓なのではないでしょうか。しかし、彼らが

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

後に通らなければならない数々のことは「痛い経験をして学びなさい」というような悠長なことではなく、まさしくそのことである者達は命を失い、その信仰生活までもが滅茶苦茶となっていくことを私達は後の聖書の記録により知っています。

このようなことを考えます時に、私達はおのずと一つのことに導かれていきます。それはたとえ絶大なる権力とカリスマを持った人間がその権力を民の上に振り回し、好き放題をしても、その人間もその人間が治める国も全て神の御手の中にあるということです。

先ほど親と子の関係をお話ししました。親は時々、子が痛い目に合うということや予測しながらも、それでも子が願い続けるなら「それならやっつけてらん」と、その子の願いを受け入れることがあります。そして、そのような時には親としての一つの覚悟をしています。すなわち、その覚悟とは心配していた通りのことがその子に起きてしまっても、最終的にはその子の親として、彼、彼女に助けの手を伸ばし、その子を実際にそこから助けだすという覚悟なのです。

すなわち、親がその子の状況を十分に掌握しており、それに対応できるということであるならば、その子の思うようにさせることができるのです。最終的にはその子は自分の権威の下にあるということを親が知っているからです。

神様はなぜ、イスラエルの民達の願いを聞かれたのか。なぜなら、このお方はこの世に起きてくるであろういかなる国も、いかなる人間もその手の中に完全に掌握することができて、そして、そこに介入して最終的にコントロールすることができるからです。

信仰の目がなければそんなことを思いもしないのですが、この世界は全て神のみ手の中にあります。人は我こそが主役という風に振舞いますが、しかし、この世界は全て神の支配の元にあるのです。たとえそれが偉大な王であっても最悪な王であっても彼らの権威は神の下にあるのです。

聖書を見れば、すぐにそれが明らかになります。さかのぼればエジプトのパロから、異教のバビロンの王、ネブカデネザル、ペルシアのクロス王、さらにはイエス様を十字架に追いやったローマの総督ピラトさえも神の御手の中に置かれていたのです。神様だけがこの世界の主権者であり、国家の興亡は全て神のみ手にあるのです。

イザヤ40章21節—26節にあるとおりです「21あなたがたは知らなかったか。あなたがたは聞かなかったか。初めから、あなたがたに伝えられなかったか。地の基をおいた時から、あなたがたは悟らなかったか。22主は地球の

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

はるか上に座して、地に住む者をいなごのように見られる。主は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、23また、もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなしくされる。24彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、神がその上を吹かれると、彼らは枯れて、わらのように、つむじ風にまき去られる。25聖者は言われる、「それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか」。26目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。主は数をしらべて万軍をひきだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大きいなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない」。

地球上の全ての権威は神様の下にあります。それを踏まえて私達は国の権威に従うのです。しかし、もし、その私達に対する人や国の権威が神の権威に真っ向か反目し、神の権威の上に彼らの権威を置こうとするのなら、私達はその時、神の権威に従うべきなのです。上の権威に従いなさいという勧めと同時に聖書は、それが神の権威に真っ向から反対する時には、それに立ち向かうことも示しているのです。

イエス様はあのヘロデ王が神に反逆し、神の民を迫害し、自らにも迫害の手を伸べてきた時「あのキツネのところへ行ってこう言え」（ルカ13：32）と時の権力者をはばかりことなく激しく批判しました。

十字架を前にしてローマ帝国の権威を持って尋問するピラトに対してイエスは「あなたは上から賜わるのでなければ、私に対してなんの権威もない」と大胆に語られました（ヨハネ19章10節－11節）。

イエスの弟子ペテロとヨハネは彼らの宣教を阻止しようとする者達に対して、時の権力者に対して確信を持っていいました「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい」（使徒行伝4章19節）。

今日、見ておりますローマ13章では上に立つ者に対する敬意を言い表しながらも「わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか」（12）という緊迫感のある言葉をパウロは書き残しています。国を神にあって愛し、それに敬意を表す、しかし、その国の歩もうとしている道に対して私達は光の武具を身につけて、常に私達は注意をしていなければなりません。武具とは自分を守るため、そして相手の攻撃に抗するために身につけるものなのです。

願わくばこのようなことがこのアメリカに、日本に、世界に起こらないことを心から願います。ですから、そのために私達が今、そう、今日から私達の国、

2018年4月15日 「アメリカに住むキリスト者として」

アメリカや日本に対してできることを心にきざんで、今日のメッセージを終えたいと思います。今日、見てまいりましたローマ書を書いたパウロはテモテに宛てた手紙の中にこう書きました。

「そこで、まず第一に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っている全ての人々のために、願いと、祈りと、取り成しと、感謝とをささげなさい。それは私達が、安らかで静かな一生を真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。これは、私達の救い主である神のみ前に良い事であり、また、み心になうことなのである」。 Ⅰテモテ2章1節—3節

私達はこの国のリーダーに対して執り成しの祈りをし続けなければなりません。彼らとて人間、過ちを犯すものです。自分の益や面子ばかりを考えて、自分の名誉欲とか力を誇示する、そんなことを国政に反映させてしまうことが起きてもおかしくないのが人間が持っている権威というものです。ですから、私達は同じ人として彼らが全てのもを支配しておられる神様の御心にかなったリーダーシップを発揮することができるように、執り成しの祈りをしなければならないのです。

これからの世界、このアメリカ、私達の母国、日本はどうなっていくのでしょうか。私達は人の権威と共に、その人の権威をさらに圧倒的にしのぐ神の権威というものを知っている者です。そのような者であるからこそ、この世界で繰り広げられることをしっかりと注視して、執り成しの祈りを捧げ続ける者でなければならない、そんな責任を神は私達に授けてくださっているのです。お祈りしましょう。